

「強くなりなさい！弱者を虐げなさんな！」
私にはさう聞えた。

世の中のかみなりをして幾多の細民を泣かしてゐる人にこの訴が聞いてほしかつた。その哀願を聞いてやつてほしかつた。さうでなければ彼は安らかに昇天出来ぬと思つた。

「からたちの側で泣いたよ、みんなみんな……」

さうだ、彼は泣いてゐるのだ。弱肉強食の世を歎いてゐるのだ。

「カサリ……」桐の大きな枯葉が落ちた。蛙の体でやつと支へられさうだつたが果敢なくも下へ落ちてしまつた。

「強者のために虐げられた弱者のお前のために私は涙を流すよ。だから安らかに眠つてくれ！」私はさう祈つた。

「強者でありたいなあ——さうしたら誰をも虐げはしまいに」

晩秋の夕暮

一圓 宜雄

畔道傳ひに田圃に出た。夕陽は將に雲間から漏れてゐた。

父の死

末松 修

眠るとも無く覺めてゐるとも無く、夜明前のうす寒さを感じながら横つてゐた自分は突然耳元でけたましい聲、而も涙ぐんで居る様な聲で起された。

それは兄が父の最早や絶望な事、その爲に丑村に行つてゐる姉に知らせに行つてくれとの事であつた。

昨日來、母から父の経過につき語られ、萬一の場合には慌わてない様にとさとされてはゐたが、よもや其れが眞實とならうとは信じては居なかつた。大きな悲しみと失望とをいだきながら父の居間に來た。

父は未だ感覺が有るらしく何事か云つて居たが聞き取れなかつた。

後髪を引かれる思ひで自轉車に乗つて姉を迎へるべく丑村へ向つた。心中にたゞ父の無事な事を祈りながら

月が未だ西の空に寒さうに残つて居る。

明方の鳥がガア／＼とざわめきながらホンノリと明い東の

四方は薄氣味悪い程靜かである。橙色をした雲は太陽の周にだけ濃い色を残してスーッと一かたまりになつて薄雲の様に細長く何處へともなく消失してゐる。一陣の風が稻田の上を吹きなでて路傍の桐の木の枯葉を誰さはるともなくハラ／＼と落した。一日の仕事をして歸る農夫は空を仰ぎ明日の天氣を思ひ如何にも氣持よげに手に持つ鎌を振り／＼此方へとやつて來る。

一群の雀は小屋へ歸るのか時々一緒にチュチュと鳴きながら向ふの方へ飛んで行く。

僕は思ひ切つて高調子な口笛を吹き／＼鳥の細道を辿つた兎角する中に太陽は大きく力なく西山に入り灰色と濃い紫色の夕暮の帷は何處からともなく湧き上り天地は全く寂漠の闇に包まれた。

彼方に聞える城山の鐘の響も特に目立つて何となく晩秋を思はせ一入哀愁の念を加へさせる。

空に向つて飛んで行く。今日までは鳥の聲も他所事として氣も掛けなかつたが今の境遇としては何んとなく胸さわぎがする。

父子二人連れで行く背負袋の行商人、自分は再び彼等の様にむつまじく此の様な道を歩く事が出来るだらうか。

漸く犬上川まで來た。去年の春此の川の下流で父と二人で小香魚を捕へた事が思ひ出される。嗚呼之も又在りし日の思出とのみなるのだらうか。

先方に着いて姉は迎へたものゝ、やはり心はせく、足はだるい。向ふに白く朝霧に包まれたお城山が見える。

あの麓までだ。道は未だ遠い。

思ひは何時しか家にもどる。あゝ今頃は……既にとぎれてはゐやしないだらうか。さうすれば母の泣顔泣くに泣かれず無い齒を食ひしる青白い顔!!一心に父を見詰る皆の顔!!走馬燈の如く頭に現れる。お父さん／＼と叫ぶ妹や弟の聲が耳の何所かに聞えて來る。あゝ自分はどう生ける父を見られないかも知れない。心だけ急いで足ははかどらない。

×

家に駆け込むなり、只今も云はず「どう?」と心配氣に聞

けば青い涙の溜つた目が一齋に此方に向く。矢張り駄目か兄が顔で此方へこいと合圖をした。泣いて聲が出ないのらしい。走る様にして父の寝てゐる横に坐り、無残にも蒲團からはみ出てゐる蠟の様な手を握つて、お父さん!! 力のある限り呼んだつもりだが、涙と一緒に出て平常の半分も出てくれない。然し父は未だ生きて居てくれた。と云ふより寧ろ呼吸を續けて居たと云方が適當かも知れない。

だがその手!! 何んと云ふ冷たいのだらう底まで透つて居る冷さだ。

父は蠟の様な顔をして如何にも大儀さうに喘いでゐた。

再び大聲でお父さん!! と呼べば「オーイ」とたつた一言而もかすかに遠い所で……之が最後の言葉だつた。

「もう御臨終です」と醫師の言葉に大きい者から順次に筆に水を含ませ代る／＼唇を濕した。

弟の手によつて打出された鈴の響がうす明い朝霧の中に消えて行くと同じく父は次第／＼に息づかひが少くなり、終に再び歸らぬ永遠の旅に上つた。

母は耐え切れなくなつたか隣の部屋に行つた。多分皆に涙を見せない積りなのだらう。

へない。然し心の何所かに或る淋しみあることは有るが……

(終)

鹽田

平野 寛

涼しいかなり強い爽やかな海風が吹いて來て朝の間讀む本の頁がばら／＼めくれる。

昨日濱で拾つて來た真珠色の貝でめくれようとする頁の上をおさへた。讀書もほんの申譯ばかりで早速鹽田を見物に行く。道々の白いすゝきが一樣にゆれる。時々足もとの叢から赤い蟹がはい出す。濱邊に出るとよきりの聲が聞えて來るもう鹽田が目の前に擴つて、まぶしい日光がはてしない廣い田一ぱいにかゝやいてゐる。かげらふの様なものが田の表面からたちのぼる中を熊手の様なものを持つた人々があちらこちら表面をならしながら歩いてゐる。

鹽を造る小屋がいくつとなく濱邊の松原に沿つて並んでをり、あまり高くない煙突からは茶褐色のかすれた煙が立ちのぼつてゐる。

姉等は其所を去らずに泣きくすれた。兄も泣いて居る妹も弟も、然し自分だけは何故に泣かれないのだらう。

心で泣いて居るには相違ないんだが……やがて僧が來る。枕經とかが上る。

死んだ父の體は實に小さいものだつた。人は死ぬと皆此の様に小さく成るのだらう。日頃人一倍大きかつた父が冗談にも俺の棺桶は常の人二倍は要ると笑つてゐたが……

今見ると自分より小さい弟程もない。

忌はしい二つ折りの紙の下から薄く禿げた頭だけが見える細い線香の煙がふら／＼と立昇つて部屋の暗い角へと消えて行く。如何にも死んだ父を誘ふが如く。

X

父の死んだのは糖尿病の昂じた結果だつた。何等の餘病も並發せず樂々と死んで逝つた。

兎角後の色々な儀式もすんで此に一年近くの年を経たが何事につけても父は未だ生きて居るとしか思はれない。

「學校で父の無い人は？」と聞かれても始めは他所事の様にして他の人が手を上げて此方を見るのに始めてハツと手を上げる始末、自分には父が無いのだとは未だにどうしても思

なぎさの方に枝さしのべた松原の白い砂の上を靜かに小屋の方へ向ふ。小屋は茅葺で黒ずんでをり思つたより小さい。小屋に入ると急に熱帶地へほり出された様なむし暑い息づまる氣が胸に迫る。

小屋の内には五坪位の平で大きな釜にしほがぶく／＼泡を立てゝにえ立つてゐる。そしていひ様のない一種獨特の臭ひがそあたりに漂つてゐる。老人が餘念なく釜にコークスをほり込んでゐる。

片隅のしきつてある中には美しい鹽が、山と積まれてゐたちよつとなめて見たらやはりからかつた。

老人に一禮して小屋を出る。丁度長いトンネルから汽車が出た時の様にすつとした。鹽造りも容易な業ではないらしい

(一九二八年八月十日)

御大典生けるしにめぐり合ふ

我がうら若き十七の秋



商 買

角 田 芳 夫

どんよりと曇つた日であつた。母は勝手で何か食事の支度でもしてゐたのだつたらう。その時

「今日は、うつとしいお天気さんで」……商人風の男が入つて來た。母がその聲で表に出た。

「おいでやす」「安すい毛布買はんか？ 安うまけとくぜ」と風呂敷包をときはじめた。一つを取り出して

「これいらんか。この壹圓八拾錢のいらんか？」

「まあよかつたわいな」「壹圓八拾錢やでこんな安いものがあるかい。手に取つて見」「……………」「え！ 買ひやがらん、まけとけ！ 壹圓五拾錢どうや」「……………」「え！ まだ買はんか、捨てちまい。え！ 壹圓とどうじや」「何んば高くて安くてもいらんわいな」「そしたらこれはどうぢやちとえーぜ、參圓八拾錢」「まあよかつた」「え！ 馬鹿奴郎ちつとも買ひくさん。そしたらつるの一聲貳圓とどうじや」母はおそろしなつたのだらう、おくへ行つてしまつた。

春 之 秋

上 林 道

「え！ ほんとにちつとも買ひくさん。あほたれめが馬鹿奴郎」と悪口雑言をはきながら、眞赤になつてお茶の禮もいはずぶん／＼怒つて門を出て行つた。
その後僕は思つた。
こんな商賣もあるものかな。

池

若葉の繁つた森の影が、澄みきつた池の面に影を落して、邊は靜かに葉のそよぎもない。池の樋に赤蜻蛉が止つてゐる。淵の若葉は長閑な日の光を吸つて、のび／＼と伸びてゐる。強い青葉の香りを含んだ風が、微かにそよいで、鏡の様な池の面に小さな皺を走らせた。畔の笹叢がざわ／＼とゆれる。と足元から青蛙がどぶんと音を立て、飛び込んだ。はりつめた池の面が破れて、波紋が向ふに届いた。

若葉の脇から白い綿の様な雲が顔を出した。ふと氣がつくと池の面にも白い雲が浮いてゐた。

夜

十三夜の月は、その美しい影を中空にみせて、靜かな秋の野に青白い光を投げてゐる。邊は寂として蟲の音さへなく、梢を吹き渡る風は、冷かに身にしみる。秋車の葉末には、雨上りの露に月が宿つて、金銀の玉かと思はれる程美しく輝いてゐる。

路傍の小川の氷は、名もない草の根を洗つて、哀れな調を残して、永久に流れて行く。

サツト吹き渡る風に、稻穂はざわ／＼と音を立てた。
その時、草叢の露がホロ／＼落ちて、僕の足を濡らした。

虫の歡樂場

岡 庭 博

電燈の下に虫が集まつて來た。強い光を浴びて飛び廻つて居る。上へ飛び横へ飛び前へ飛び後へ飛び。止む時がない。疲れた奴は下へ落ちる。狂つた奴は机の上まで來る。電燈のカバーから七八寸の房が垂れ下つて居る青い房赤い房、カバーの中で躍つて居る虫、外で躍つて居る虫、周圍を何回

夢を求むるもの

北 村 清

も／＼も廻つて居るものもある。
彼等に取つては光は青い火、赤い火だらふ。そして電燈の下は彼等の一大歡樂場だ。躍れ、狂へ、飛び廻れ。彼等はさう言つて居るに違ない。

夢を求むる男があつた。彼は夢を見んと努力したが決して夢を見ることが出来ない。夢とはどんなものだらうか、夢とは如何なるものか。……………彼の謎の一つは夢であつたに違ひなかつた。何を夢と言ふのだらうか。何時もかうした疑問をいだいて、常にそれを解決すべく試みた。努力した。けれど夢を求むべく努力するとはどうすることだらう、どう努力するのだらうか、夢を求むる努力は如何なる方法だらうか。果してその男が努力の方法を知つてゐたか。

目ですべてのものを見る、色んなものが目にうつるのだ、だがそれは夢ではない。

めづらしいものを見る。不思議なものを見る、確かにめづ

らしい、不思議なものである。所謂夢か知らと思はれるものである、然しながらそんなことも夢ではなさうだ。

町の中を歩きながらでも夢といふ事を彼は考へてゐた。夢になやんでゐた。常に目をつぶつても見た、色々の事どもが心に浮ぶ、けれどそれは見えるのではない、そして夢でないことは明らかだつた。

床に就いて目をつぶる、そのときも色々の事が浮んでくるが「これは夢ではないのだ」

と思つてゐると、知らず／＼眠りに落ちて行つてしまふ。彼が目を開き、気がついた時は今眠りについていた許りだと思つてゐるのに、早や夜が明けてゐるのだ、そして夢らしいものを見た覚えもない、確かだ、確かに彼には夢は見得られなかつた。

夢を見るべく努力するために、眠られなかつたこともあつたのだ、かうして毎晩、平常の時刻になると、黒く、重く、深い深い鉛の様な眠りに落ち入つて、眠から引離されることは出来なかつた。瞼は二つの重々しい墓石の様に彼の目にかぶさる。そして夢なるものは依然として判明しない。

彼は元來が樂天家だつたのか、何事の心配もなく氣樂であつた。

枯草に蔽れた野原、桔梗あり、刈草あり、女郎花あり、今を盛りと咲く。だが彼等は全て低く頭を垂れてゐる。

やがて来るべき死を豫期してゐるのだろうか？

秋は来るべき物は長き眞冬の眠りであるだけに、さすがに春とは異つて淋しみを感ずる。

野も山も風の吹く毎に落葉は深くなる。鳥の音、彼等は美しく歌つてゐるが、やはり悲哀な所がある。秋の聲はすべて悲哀である、靜寂そのものである。風はうなりを立て、裸木に吹きつける、やがて此の風は變つて木枯となり、川の水も冷たくなり、何時の間にか虫の音も消えて、愈々霜が降りやがて亦白銀の世界が訪れて来るだらう。たゆまない自然の進軍何んと速ではないか！！

鳥の一聲々々秋は段々深くなる。楓、うるし、葛等が紅葉し柿の實が熟れ稲が實る。奥山に茸が生えて人知れず腐る。空は澄み切つた濃藍所謂日本晴である。

秋の夜の美観、亦筆舌に盡し難い所がある。手も届かん許りに澄切つた月、其の青白い光に照された時何人も自己を忘れ恍惚となる。實に秋の夜の月は不思議な力を持つてゐる。

神秘幽遠な月、荒涼たる野、哀々たる禽や虫の聲、此皆秋

つたに違ひない、然し夢を未だ知らざることになやんでゐた彼は醫師に尋ねた、若い醫師は最新の夢に關する學說を説明し出した、醫師はかくも尊敬すべき職業なりと思はせるところのギリシヤ語を多く交へながら……然しその醫師すらも結論はわからなかつたのかも知れぬ。勿論彼は何時のまにか説明を聞いてゐる中に頭の中がゴタ／＼してしまつたが、或るとき夢を見たのだ。彼が目覺てから思ひ返へすと夢を見てゐた、常に心の中で求めつゝあつた夢を、そしてその見たと言ふ夢、それは彼が夢を見てゐる夢だつた。

×

世のすべての物事がかうだ、夢を欲すれば夢を見てゐる夢しか與へられぬ、そして自然に嘲笑されてゐる様な調子だ。

秋

粕谷定輝

中秋。暫く目を轉じて郊外の景色を眺めよ。眞裸の樹木、雜然たる山々、虫の音、鳥の聲頻りに耳朵を打つ。

の特色で無くて何だらう。

四季の風景

松宮實

四季の遷り行くに隨つて、風景も様々に變化するが、とりわけ、春の花の眺、夏の青葉の色、秋の月の姿、冬の雪景色は入趣があつて興が深い。春は野も山も百花が咲き亂れ、吹く春風に花の香が漂うて、何とも云へぬ感じがする。櫻花が遠くの山に咲いてゐるのは雲の下りた様に見え、近くの丘に咲いてゐるのは雪の積つた様である。

櫻の木の下で花びらが散るのを眺めると、吹雪の様で美しい。夏は山も森も田も畠も庭も、唯緑の一片で包まれて目覺むるばかり美しい。緑がしたゝるやうな青葉の下で、涼風に吹かれてゐる心地よさ、これだけは夏の暑さを忘れる程である。

秋は紅葉の眺めも美しいが、澄みきつた空に白い月の照り亘つてゐる夜景は更によい。萩、尾花の中に雨の降る様に鳴きしきる蟲の音を帯びて、枝ぶりの面白い松の上に光つてゐる。

る満月を眺めた時などは、心も清らかに澄み出るやうである。冬は多くの草花も枯れ果てゝ寂しいが、自然は雪の美観を與へて、我等の心目を一新する。一夜の内に雪が積つて見渡す限り銀世界となつた朝の美景は筆には盡せず、言葉にも言ひ盡せない。それに朝日の照りそなた時は殊に美しい。(完)

最後の言葉

清水 正義

「大きなつたら、えらい坊さんになれよ。わしはもう此の汽車でかへるでな。体をだいいじにして勉強せないかんぜ。もう五六日して田んぼの方もすんだら、また出て来るでな」と云ひのこして父は汽車でかへつてしまはれた。

それから三日目の朝の事、兄さんが病氣で彦根病院へ入院しられたから、僕はそこへ行つた。すると彦根にゐる末の兄さんが、目に涙を一ばいたためて來られた。病氣の兄さんはそんなことはちつとも氣づかず「日曜日ちやで早う來てくれたのか、今日はゆつくり遊んで……」と。次を語らうとして末の兄さんの顔を見られると、いつもとは様子が變つてゐる。

これは何かして叱られたなと思はれたらしい兄さんは、床の中から首をのびして「おいなんして泣いてるんぢやい。叱られたな——」と云ひもはてぬ先に末の兄さんは手にした紙をつきだしながら「お、おとつあんが……」と泣きふしてしまはれた。私はもう目もくらんで床にゐる兄さんも末の兄さんの顔も見えなかつた。

なつかしいお父さんの顔はそれから見ることが出来なくなつた。私は驛で聞いた最後の言葉が時々胸をいためる。あゝそれは早四年前の六月の事であつた。

或る夜

それは未だ暑くらしい八月の末の事であつた。庭の萩が白い白い花を咲かせて夕闇にさへほんのり浮いて見えてゐた。

終日照りつけた太陽の熱は大地にくい込んで夕方の涼しい風が吹く頃となつても、何となく湯槽のそばに立つてゐるやうな氣持がした。

「いつまでも暑いな——」と、兄さんは獨言の様に云つた。「隣へお風呂もらひに行かう！。團扇を忘れん様にな——」とつけたしたまゝ、兄さんはさつ／＼と先へ行つてしまつた。

僕は二本の團扇を持つてその後をおつかける様にして外へ出た。「スツ——と夜の大氣を吸ひ込んだ。……と、僕は秋だと思つた。もうあたりは暗くなつて可愛いお星さんが小羊の目の様にまたゝきしてゐた。

隣の家は軒端の障子をからつとあけはなしてあつた。電燈の光は近くの畑の作物まで照らしてゐた。罐詰の罐がころがつてゐるのさへ見える。蚊くすべの煙はゆら／＼と登つてそれが天井まで行くと、春霞のたなびいた様にすつと擴がつて行つた。

家に歸つて床についたのはもう九時過ぎでもあつたらう。せまい蚊帳の中に兄さんと枕を並べて寝たがなか／＼ねつかれない。思ひ出した様にばた／＼と扇をつかふ。びつしり閉めた家の中はなか／＼蒸暑い。藪蚊が蚊帳のふちにブーンとなく。兄さんもねつかれないのか横になつたり、仰向になつたりしてゐられる。——ツ——ツ——ツ——……十。お！十時だ。だいぶんあたりが靜かになつてときをり天井裏を鼠のかける音がする。ちつとひんやりして來たなと思つて、蒲團を腹のあたりまでかけて目をつむる。兄さんはもう話しかけない。たのしかつた夏休の事などが目にちらつく。

「ス——フ——。ス——フ——。」兄さんのねいきだ。それから三時間も過ぎた頃だらう。

「これッ。正義蒲團をきんか。」するどい兄さんの聲がよくねてゐた私を呼びました。そして太もものあたりをピツシリ。呼びさまされてきよとしてゐた私は、びつくりして自分の布團をさがした。「ア——ッ。」僕の蒲團は兄さんがきてゐられる。そして兄さんの蒲團は蚊帳のすみつこへおしやられてゐた。二人は顔見合はしてくつすり笑つた。

留守

田中 宗 勇 紀

昨日の午後から母は叔父さんの病氣を見舞に里へ歸つた。僕一人留守番をせなければならぬ。何を考へても心配でたまらない母に頼んで四月まで僕の家を下宿して居た、先生に來て頂く事にしてもらつた。二時汽車で母は歸つた。僕一人がらんとした家の中で本を開けたが何時もの様に出来ない。思切つて母校へ野球の練習に行つた。四時頃歸つたら下段にある赤靴に目がついた。僕は思はず先生と呼んだ。中から「お

い」と返事が聞えて来た。喜んでとび込んだ。二人きりで色々話をした。其の夜は話しながらねた。

戸のすき間から明い日光がさし込んでゐる。道には馬車や自動車の音がたへまなく聞えて来る。何時も母に呼起されるのだが、母の留守でもあるし日曜でもあるのでぐすり朝寝をした。

先生は長い髪をふとんの外に出してまだ寝てゐる。僕は先生を呼んだ「先生もう起きようか」「先生もう起きようか」「まだ早い」先生は目をこすりながら返事をされた。僕だけ起きて店先の戸を開けて茶をわかしかけた。ねぼけ顔した先生は井戸端で揚子を使ひはじめた。朝食をすまし二時まで勉強した。

晝食の時隣の仕出屋のおばさんが「宗ちゃん此をおかすにしておくれ」と云つて、ふたに大きな字で柳屋と書いたさげ箱をくださった。中には黒い焼けあとのついた鯛が二匹並んでゐる。お母さんに見せようと思つてすぐに戸だの中へ入ってしまった。先生に早くかたづけたと笑はれた。三時四時と時間はたつて来る。ふと昨日言付けられた風呂場の掃除を

と、支那手品だ。

支那人はどらを「ぢやん」と鳴らしながら「支那手品あります。面白い支那手品あります」と奇妙な聲でどなつてゐる「さあ……これからやります」茶碗を二つ並べて小さな玉を手持ちながら「日本語では一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ」「イングリッシュではワン、トゥー、スリー、フォー……」「三つの玉を一つの茶碗の中に入れてもう一つの茶碗にも三つ入れて……、ハンカチを上にかけて、「ぼつ」と氣合をかけて茶碗をあけると、これは不思議？ たしかに三つづゝ入れてあつたのが、一方には二つ、一方には四つとなつてゐる。實にうまいもんだ。あいた口が塞がらない。皆の人はぽかんとして見てゐる。奇術師は更に「今度は曲藝をやります」といつてつれて来た。子供にさか立をさせたり又自分の頭の上でさか立ちさせたりしながら「支那子供うまい」「支那子供うまい」見てゐた人達はどつとふき出した。やがて奇術師は「支那子供うまい……、お金なげてくだはい。なげてくだはい」。

あちらこちらから銅貨や白銅貨がなげられた。奇術師はお金を算へて「これではすくないもつとなげてくだはい」とい

思ひだした。わすれたら大變と掃除をして母の歸りを待つたかたん會社の五時の笛に驚いて驛に走つた。時間は少しあつた。

元氣よく上りがは入つて来た。人はたくさん下りたらしいが、汽車が出てしまはなければ分らない。はやく出てほしいがなあ、やがて車掌の笛が聞えた。汽車が出て行くにつれて下りた人がだん／＼見えて来る。母は見えない、心配になつて来た。汽車が棧橋を通り過ぎた時ばすけつとをさげて棧橋を渡らうとする母を見つけた。にはかに僕の心はうきうきして来た。早く／＼と小おどりして喜んだ。母はにっこり笑つて「ごころうさま」と云つた。僕は何か話してよいやらない。一年も外にゐた母に始めて會つたやうな氣持がした

支那手品

西田 亮三

さきほどからさしがしい鐘の音が聞えて来る。僕は何かと思つて外へ出て見ると、向ふの廣場で黒山のやうに人がたかつてゐる。走つて行つて人ごみの中を分けて中に入つて見る

つた。實によくの深い奇術師だ。今度は誰もお金を投げない奇術師はおこつてぶつ／＼いひながら向ふの方へ行つてしまつた。人々はぽかんとしてその後姿を見送てゐた。

母の歸りを待つ

高橋 金次郎

山に鳥の聲が聞え始める頃電燈がついた。僕は茶を沸かす用意にとりかゝつた。もう御母様が歸つて来られる筈なのに今日に限つて何の氣配もない。邊は薄暗くなつて電燈の光が強くなつた。時々後の山から、やはらかい風が吹込んで来る。段々と暗くなるにつれて静かな世界に變つて行く。御母様は未だ歸つて来ない「どうしたらう」と門口に出た。が御母様らしい姿は少しも見えない。又内に入つて火を燃して居ると僕を嘲弄する様にゴト／＼と風が戸に當つて何處かへ逃げて行つてしまふ。と突然後の戸棚で鼠がゴトツ／＼と音を立てゝ内の静けさを破る。座敷から優長なカチリ／＼とした時計の音がはつきり聞える。「御母様は未だかな」と思ふと心配になつて来た「御母様が重い荷を持つて、細い山道を通つた。

そして如何したはずみか石を踏外して、コロコロと崖の所を轉つて、中途でやう／＼小さな木につかまつて止つたが、身体は自由にならず、人は呼んでも誰もこず、次第に苦しさが増して深い谷底に落ちて死なねばならぬ」と、云ふ様な危い所で困つて居られはすまいか？……と悪い事を聯想し始めると、じつと坐つて居る事は出来なかつた。早速外へ飛び出した。外はもう眞暗どこかで鳴く犬の遠吠が聞える。宮を越えて川向ふの遠い／＼山に行つて居られるので、道は大變危険である。僕はやう／＼の事で橋まで來た。すると、川下から僕の心を落つけさすかの様に、涼しい濕氣を含んだ風が身体をなでて行く。島に出た。大きな聲を出して「御母様？」と呼はつたが、唯其聲が靜かな山に響いて何處までも響き渡つて行くだけであつて、何の答もない。僕は泣きたかつた。其時眞暗な向ふの方から人の話聲がもれて來た。「ハッ」と思つて近づくと先頭が御母様？「アッ御母様？」「おゝ金次郎」と……僕は嬉しかつた。そして其晩は楽しく夕食にいた。

あ　　ぶ

柴田禮二

それは秋にも似ずどんより曇つた或る日のことです。私は練習を終へて御影石の上に腰を掛けて靴をはいてゐました。するとそこへ四分程のあぶが歩いて來ました。大方花の蜜を探してゐるのでせう。そのあぶは、茶色の光つた背に二枚の黄色い筋のある淡黒みがかつた小さな羽を着けてゐました。さうしてずいぶん黒い細い二つの足で私の靴の側を歩いてゐます。私は大分疲れてゐましたが、氣まぐれにそのあぶを踏んで見ました。しかしどうしたのか、其のあぶは運よくつぶれずに今迄と同様に羽をびく／＼動かしながら歩いてゐます。私は少しいら立つて前よりも強く靴を其の上へ押へ着けました。足をよけて見ると、今度はまぎれもなくつぶれてゐました。黄い腹からは、白い臍物と共にきたない汁が出て可愛らしかつた羽は、ちり／＼に破れ散つてゐます。なんとむごい死体でせう。踏んだ靴の裏を見ると、小さな羽が汁と共に砂にへばりついてゐます。私はあぶとは言へ一個の動物の

魂が、今此の世から消え去つたのだと思ふと、たまらなく淋しさを感じました。私はぢつと其の死体を見て居ました。其の時青ぎりの落葉がから／＼と轉がつて、先程のとよく似た一匹のあぶが飛んで行きました。私の目のせいにか、殺したあぶの仲間が探してゐるやうに見えました。翌日何氣なく其所へ行つて見ると死体は見えず、砂や泥にまじつて汁と羽とが残つてゐました。大方誰かの靴に着いて行つたでせう。

長命寺の祭

松井敬三

八幡町から一里半程西北へ行くと、長命寺といふ處がある高い山の上に長命寺といふ寺があります。西國三十一番の札所であつて、景色がよく夏季汽船の遊覧客が多い。

七月の初頃に長命寺に「千日祭」といふ祭がある。八幡へ遊びに來たついででもあると思つて午後六時頃に乗合船に乗つて行く。船頭が人を取合せる。無理にひつばられて或舟に乗つた。人が五六人乗つてゐて、僕が乗ると舟はすぐ出た。堀に似た川、ウン豊臣秀頼が八幡山へ城を築いたと聞いてゐ

文苑

四三

る。其處を通りぬけ町を出た。田畑が一面に見渡せる。月がボカンと出てゐる。日はとつぷり暮れて八幡山の彼の鶴の形をした山が、青白い夜の空に黒く、くつきり浮出てゐる。舟が波を立てゝゐるのでアシがザワ／＼音をたてゝゐる。魚が飛上る。皆は無言である。昔なら此のやうな景色を歌に詠むだらうに、後から來た舟が追越す。「ヤイ覚えておれ」と船頭は言つて笑つた。廣い所へ出たり、細い所へ來たりしてやう／＼長命寺の濱に着いた。上陸してみると人で一ぱいだ。さ

はめいてゐる中を「アイスクリーム」「氷水」等と言ふ聲がきこえる。店のある所へ人が黒だかりになつてゐる。

ガスをともしてゐるのでガス臭い「登りませよう」と六十五位な元氣な爺さんが僕にいつた。「所に登りませう」といつて登りはじめた「初めてかな」「はい」何にも知らないと思つて爺さんは得意になる。一回程登ると少し廣い所へ出た「一服やれい」爺さんは相變ず元氣だ「おゝ美しいだらうが」「ウン成程美しい」赤い提灯を着けた舟で五六十艘もあちらへ行つたりこちらへ來たりしてゐる。水に映つた提灯の灯は、ゆる／＼動いてゐる。一艘のモータボートが青い灯をつけて舟と舟の間を疾走するのは壯觀だ「行かう僕は立上つた一寸

上ると木立の一層深い所へ來た。眞黒だ「あゝ此邊に夫婦石といふ石がある。ふむと腹が痛くなる」と老人は眞面目に云つた「何々の……米の數よりも幸多かれと神や守れる」と何だか念佛のやうな物を何邊もくも云つた。老人は無言のまゝもう僕の事は忘れてしまつた。おりたのは九時半頃であつた。舟に乗つた。人がすくないので仰けにねた。星が一ぱいだ。冷い／＼青い空を白い／＼雲がふわ／＼通る。時々エリ等があるから舟底がざあ／＼となる。今日の爺さんの事などを思浮べて、淋しい氣持で親類の家へ歸つたのは十一時頃だつた。

米谷君の思ひ出

新谷 又平

半月も前の事だ。其の朝學校で米谷君と同じ村の多林君に米谷君の悲しみを聞いた。……と云ふのは米谷君が風を引いた爲、二日餘り缺席した。私は風を引いた位と思つて餘り心配もしてゐなかつた。それが缺席してから三日目の朝此の様な悲しみ。米谷君はもう此の世の人では無かつたのだつた

或る者は悲しんだだらう。或る者は夢かと許り悲しんだだらう。其の日は私はほとんど沈黙であつた。どうして此の一日を愉快にすごせ様か、米谷君や両親に對してもすまない。あゝ私は一人の親友を無くしてしまつた。

翌日朝會の時先生から米谷君の死去のおしらせが有つた。葬式には米谷君の級の擔任の先生と級長とが參列した。私は其の日學校から歸つてすぐ、無き米谷君の悔みに行つた。初めて米谷君のお母さんに會つた。其の時お母さんが米谷君の病んだ様子等話して泣かれた。佛壇の前に新しい位牌が立てられて淋しく線香が立登つてゐる。五六日前まで一緒に遊んだ米谷君、今は一つの位牌と變つてしまつたのだ。それと思ふと臉が自然とぬれて來た。

米谷君の家から歸る時はもう夕方近くであつた。米谷君が生前毎日々々中學校へ通つた。さうして其の自轉車にふまれたかと思はれる道端の草が、時々つめたく私の足をなでた。道にそうて流れる川、此の水こそ一緒に水泳をした此の夏の事等よく知つてゐるだらう。さもその當地を語る様にさらさらと悲しさに流れてゐる。さうだ學校で私がよく圖畫の鉛筆を借りた。鉛筆にはかぶせが粗末ながらもかぶつてゐた。

其の鉛筆のおかげで先生のおしかりを受けなかつたのだつた又時々朝一緒に自習室で勉強した。或る試験の朝だつた。共に勉強した。あゝさうだ其の日は一時間目は算術の試験だつた。一つわからぬ問題が有つた。それも二人してとう／＼

解いてしまつた。又米谷君は運動家だつた。時々二人で球投げをした。私とはすつと上手だつた。自轉車競争もマラソンも皆及ばなかつた。それでも米谷君は何時も私の相手になつてくれた。其の親友は今草葉の露ときえてしまつた。

あゝ米谷君は彼の村の流れのほとりに靜かに／＼眠むつてゐるのだ。

秋の夕暮

郡田 浩次

寺の鐘がゴーンゴーンとなる。太陽は今まで頭の上を悠々として歩いてゐたが、何時の間にかかけ足になつて西の山へ急いでゐる。見るまに杉の木よりも低くなり、便所の屋根より低くなり、だん／＼低くなつて終に土堤の向ふの森にかくれた。黒い森が眞赤になつた。木と木との間からもれてくる

光が田の水に當つてきら／＼反射してゐる。太陽の姿はもう見えない。西の空は夕焼で眞赤だ。

私だ。夏とちがつて田の中の一本木の黄味がかつた様子吹きさらしの田の上に立つてゐる姿、寺の鐘のひびき、大きな屋根、その後の杉の木、いてうの木、どれも秋の淋しさを漂はしてゐる。つめたい風が頬をうつてひやりする。家々の煙突が盛に黒煙をはき出す。お母さんは夕飯の支度にいそがしい。藏のかべが眞赤になつてゐる。青い空が次第に薄赤色に灰色にねづみ色にとかわつたゆく。電燈がついた。庭にはむしろや玩具がちらかつてゐる。表からはほうきの音、道に水をまく音、バケツにひしやくがあたつてがちや／＼いふ音等がいりまじつてさわがしく聞える。工場の女工たちが黒い門から出てあちらに一むれ、こちらに一むれとなつて歸つてゆく。靴直しや様々の行商人等が、大きなものを肩にのせて歸つてゆく。

馬車ひきが大きな聲で流行唄を歌ひながら馬をひいてゆく自轉車、自動車の音がして一そうさわがしい。ラヂオが軍艦マーチをやり出す。

「御飯ですよ」母の聲がする。晴々しいさわやかな秋の一日

は暮れた。あたりは夜の静寂につままれた。

夕立

柴田 正己

池の周圍に萩や山吹が、青々と何れも勢よく茂つて居る。その下蔭に今迄隠れて居た青い小さな蛙が、何んと思つたのか不意に飛び出したが、やがて青々と苔蒸してゐる石燈籠の上に踊上り、さも愉快さうに庭一面を見下しながら、不思議な聲でキヤツ／＼と二聲三聲鳴いた。さうすると其の下の小池に遊んで居た多くの蛙が一聲にガ／＼と鳴き出した。

一緒に見てゐた妹が

「お母さん蛙がなき出しましたが、夕立でもするのでせうか」ときいてゐた。その聲が終るか終らぬかに轟々と雷の音がしだした「あれ」と妹が驚いて母にすがりついた。もう空は眞黒い火山の吐く煙が廣がる様に、雲は雲をはいて、青空を捲き上つて來た。見る／＼中に残る隅なくその中に捲かれてしまつた。そ時電光一閃「ほら光つた」と妹の聲、瞬く間に大砲のつゞけ様に破裂する様な轟がした。大粒の雨が勢よく

地に穴の明く程おちて來た。雨戸を繰る音が忙しげになる。男も女も一散に驅けてゐる。何時でも星を頂いて歸る爺もさすがに歸りかけた。けれども年老いてゐるので、はかばかしく走れない。濡れ鼠の様にぐつしより濡れながら蹠を肩に鎌を腰に雨をくぐつて、心ばかり急いで行く。外は全く雨の世界だ。庭一ぱいに騒いで居た蟬もどこへかくれたやら雨の勝鬨の響ばかり、寛の音よりも芭蕉の葉の方が高く聞える雨雨雨。僕はつく／＼見いつてゐた。小半時もしたらうか、ふと氣がつくと雨足が細くなつた。疎になつた。空を仰ぐと雲が薄れて來た。低い雲が早く走る。足並が亂れ蒼空が高く清いただ白く光つてゐるちぎれ雲が、忘れられたやうに浮んでゐる。涼しい風に軒の風鈴がチリチリと鳴つてゐる。

入學

佐藤 正

試問もすんでいよいよ發表の日が來た。

待ちに待つた發表の日もとう／＼やつて來たのだ。

朝早く家を出た。京橋のあたりまで來ると大かたの人は足

を中學校へ、中學校へと早める。僕も一散に走り出した。

皆の面はいふにいはれぬ不安に包まれてゐる。とう／＼發表の時は來た。午前九時!!時は來た。入學か落第か?皆の目は一勢にはられ行く紙に注がれる。僕は増々不安に滿される。落第したら!!それとも?入學だろう?入學出來たならば——紙はしづかにはられ行く。先生も御心配なさつてわざ／＼來て下さつた。一四五番!!!あつた!!あつた!!!入學が出來たのだ。春雨の降る中を一散に家へ走つた。今まではりつめてゐた元氣もぬけてぐつたりとした。

田舎の夜明

横山 正一

静かな夢の國には最早や朝が訪れて來た。鼠の天井を駈廻る音に眼を開いた僕は一應蚊帳の中を見廻した。未だ皆安らかに夢の國に遊んで居る。もう夜明に近いのであらうか雨戸の隙間がほの明るい。僕は蚊帳を脱け出して縁側に出た。雨戸を繰つた瞬間朝の冷氣がサツと全身を包んだ。朝の冷氣に不意を打たれた眼は一層バツチリ開いた。が外燈一つ無い此

の村はまだ薄闇に包まれてゐた。魔物の様に聳えてゐる空山左に長く連つてゐる藪等が、薄闇の中にぼんやりと見える。然し其の薄闇は次第に薄らいで行つた。桑小屋の傍に有る雞小屋の中で「カサ／＼／＼クーク／＼」と音がしたと見る間に大きな羽ばたきが聞えて「コケコツコ……………」あたり静けさを破つたが、直ぐに後の桑畑の中に消えて行つた。雞を日醒時計と心得た兄が「ウーンウーウ」と大きな脊伸びをして起きて來た。僕は雨戸にもたれて此の清らかな朝の氣を腹の奥まで吸込んでゐた。木車小屋の勇ましい音が藪の向ふから聞えて來る。向ふの畑の中の桑が判然と見えるまでに闇は薄らいで行つた。裏の藪に巢を作つてゐる雀が今日を醒ましたらしい。「チュン／＼／＼」と囀る度に笹がさら／＼と鳴る。「が／＼／＼」其所此所でやかましく聞える。裏の藪から數羽の雀が來て電線にとまつた。何かしやべつてゐるのかしきりに首をかしげては、四方をきよろ／＼見廻し乍ら鳴いてゐる。しばらくして何か思ひついたのか急に何所かへ飛んで行つた。

東の空が明るくなつた來た。

前の道を牛乳屋が通る。新聞配達が通る。隣村へ荷物を運

ぶ健さんが、威勢よく挨拶をして荷車を引き乍ら通つて行つた。東の山の上に日が浮び上つた。何といふよい朝であらう。四方の山山が、日の光を受けて緑色に輝き前の藪は濡れた笹が、太陽の光線を受けてきら／＼と光つてゐる。

「ゴ……ンゴ……ン」寺の鐘が村にひびき渡る。

糸瓜

中島清勝

今年は畑に糸瓜が十二個も出来た。この内一番大きなのは二尺五寸以上もある。是を朝とつた。父が「皮をむけ」と言つたので、僕は裏へむしろを取り出して来てどつかと腰を下した。中ほどが一寸五分四方位に腐つてゐた。これは僕と妹が以前石を投げて、あてごつこをした時に、僕のが甘く命中したことがあつた。でそこから腐が出たものであらう。命中した時には大變嬉しかつたが、今になつてみると腐つて皮をおくのが汚くて仕方がない。こんなことになるのなら石をあてなかつたらよかつたのに。

漸く皮をむいてしまつた。皮の厚さは二分以上あるだらう

皮をむくまでには、き瓜や、まくは等の様なうすい皮だと思つてゐた豫想がはづれた。

皮をむいてしまつた糸瓜は、ねば／＼してゐて白色をしてゐる。強くおさへると、ボール紙の様な色に變つた。すつかり皮をむいてしまつた糸瓜を父の所へ持つて行つて「今度はどうするのですか」と尋ねたら「其の中の種を出して綺麗に洗へ」と言ひつけられたので、又裏へ行つて、蜜柑箱を臺にしてばたとやり出した。

すると中から多くの種がおどり出て来る。種と一緒に汁が出てくる。そのかさは丁度胡瓜の様なにほいがした。

ばたん／＼と一生懸命に、たゞけは中からまけまいと種が出て来る。今度は力一ぱいに糸瓜をしぼると、又ボール紙の様な色の液汁が、じゆう／＼出て来る。そのしぼつた糸瓜をたらひに入れて何度も／＼洗つた。ぎゆつとしればすう／＼と小さくなる。ひよつと手をはなすと海綿の様にぶくつとふくれる。いく度やつても同じやうにふくれる。かんからかに乾いたのかかさ／＼した手觸りとは違ふ。ねつこりしてゐてまるでごむの様だ。全くその手觸りと言ひ、形と言ひ、ぬらくらした所と言ひ糸瓜ほど世の中に滑稽なものはない。



戯曲

憧憬の破滅

山口彌平

登場人物

村の青年……茂吉……二十才
その父……茂作……四十八才
その母……おそで……四十五才
キャンピングをしてゐる學生A
同……B
同……O
村娘……數名
醉漢……二名

戯曲

美装した女……二名

悪漢……一名

警官……一名

第一幕……湖岸のキャンピング

湖岸の松原。青白い月夜。松並木を通して水面に月の影よろしく。右手にテント一張り、松の枝に水泳着三着、同じく淡い光を放つてゐる籠燈一個。携帶用の蓄面機を圍んで雑談の中に暮開く。

A「おいどうだい。この静けさは！僕はもうたまらなくなつてしまつた。」

B「そうだね、僕等の様に都會に住む人間にとつては、想像もつかない静けさだね。」

C 「こんな處で一年も送る事が出来りや、きつと壽命も延びやうぜ。」

A 「だから都會人も争つて、少しでも静かな郊外へ住宅を持つて行きたがるのも無理からぬ事だね。」

B 「だが駄目だ。幾ら郊外だつて、どうしてもあの油臭い都會の空氣はぬけてくれないからね。やれ郊外電車だの、郊外バスだのと言つて盛んに都會の音響を運んでくるんだもの、やり切れないよ。」

C 「僕は都會と言ふ色彩からかけ離れたかうした田舎で、遠くの町通ひのガタ馬車のラツパの音でも聞きながら、一生を送つて見たい様な氣がするよ。」

A 「駄目。駄目。少なくとも今頃の僕等にとつてはそれは全然不可能な事だ。二三日の田舎生活は、あゝした都會を忘れさせてくれるには十分だが、それも一月二月とすりやまた都會戀しい。忘れられないつて風になるんだからね。」

C 「さうだらうかなあ。だが田舎の空氣と寂寥は都會人にとつては生命の泉であり、人生の慰安だね。」

B 「全くさうだよ。それが假令二三日にしろ、かうした生活は、僕等が學業を理窟ばかり聞かされてゐる事を實際馬鹿

らしくするね。數學の公式だとか、英語の單語とか言つた断片的な事ばかり無理に頭につめ込んでゐる事が本當に馬鹿馬鹿しくなるよ。」

C 「實際さうだな、唯かうした生活が無條件で許されば文句はないんだが。亦九月になりや最初からサイン、コサインつてね、馬鹿らしよ。」

A 「おい。よしてくれ、サイン、コサイン、つて言葉すら僕は嫌ひなんだよ。」

C 「オヤツ。こりや驚いた。君はその反對黨だとばかり思つてゐたよ。」

A 「馬鹿を言ふなよ。元々そんな方は嫌ひだと言つていたじやないか。」

C 「さうだつたか。そりや惡かつた。勘忍してくれ。今後は氣を付けるからな。」

B 「ハ……。君が他人にあやまつてゐるのは初めて見るよ。」

C 「おい。皮肉はよしてくれよ。たのむ。」
(其時舞臺の左手より數名の村むすめ飾面白く歌ひながら踊つて出る。一同雜談を止して珍らしさうに彼女等の動作に見入る。)

合唱 「鯨波のおんべ祭にも 己あ村で一人ぼつち

鹽寺の盆踊りにも 己あ土手で一人ぼつち

兄さまを持たねえ娘子は 唯の一人もあんめえによ
己あばつかりは一人ぼつち。」

合唱 「とぼ／＼歸る松原で 狐狸でもかまはねえ

美しい若衆に化けて 己さあ欺して貰ひていだが

狐も狸も己さあ見ると 尻尾をまいて逃げて行く

みんな尻尾をまき／＼ 逃げて行く。」

(村娘一通り踊りぬいて退場。學生等拍手喝采して笑ひこける。)

A 「ハ……。こりや素的だ。ハ……。」

B 「狐狸でもかまはねえ、美しい若衆に化けて、己さあだましてもらいてえだが振つてゐるじやないかハ……。」

C 「こいつには面喰つた。だが素的に面白いじやないか。」

A 「全くだ。情味たつぶりの郷土藝術つてとこだね。」

B 「さうだよ、來年は僕等が一つ努力して東京の青年會館で踊つてもらはうじやないか。」

C 「よからうぜ。ハ……。」

A 「おい、どうだ、俺達も一つ踊らうよ、村の娘つ子に負け
てちや都會人の名折れだ。」

B 「よし來た。やるぞ。おい君、レコードたのむよ。」

C 「よし、引受けた。」
(Aレコードをかける。軽い調子のジャズ始る。一同立上つて一列になり肩を組んで踊り始める。)

合唱 「若きこの日は またと無きを

踊り狂つて 狂つてはねて

足取り軽く 心も空に

タラ／＼／／／ タラ／＼／／／

我等が天地に 何のあらうぞ

踊れ踊れや あくまで踊れ

踊り疲れて 倒るゝまでは

タラ／＼／／／ タラ／＼／／／

(そこへ村の青年茂吉現はる。松の陰より彼等の踊りを不思議さうに眺める。踊り賑やかに……幕。)

貧しい藁葺きの百姓家の表に面した所、左手に入口、鍬鋤等農具よろしく。部屋開け放してあり、内部すけて薄暗い中に無難作に取乱してある。左手につるべ井戸、鶏舎等あり、午後三時過ぎの光を浴びて鶏が二三羽飼をあさつてゐる。幕開く。暫くして茂作、茂吉の親子登場。三時休みに野良より歸つた處の風彩よろしく。

茂作「あゝ暑い暑い。とても暑いわい。やれやれ一服しようか。お——う。おそで！おそではんのかう。」

(中より返事)

茂作「お茶を持つて来てくれんかい。」

おそで「はい。今持つて行くわいの。」

(二人様側に腰を下して盛に流れる汗をしきりに拭ひ取る。おそで茶を持つて出る。)

おそで「まあほんまに暑いやないかいな。南に出来た景色もいつの間にやらぬけてしもたなあ。これで幾日降らんやう一日くらい降つてもばちは當らんぞ。」

茂作「かう照られては困るのう。稲は赤ばむ、野菜は枯れる

どうもこうもなつたもんじやねえわい。毎晩あゝして明神様にお祈りしても一寸もきゝめがねえが、かうなりや神様もあてにならねえのう。」

おそで「全くさうだよ。今も次郎太がやつて来てな、隣の國じや水争ひが始まつたつて、新聞に出とるつて言つていたが、かう照られてはお天道様がにくらしうなるわいよ。」

茂作「隣の國の話じやねえよ。今に此の村も水争ひよ、今も一寸池を見て来たが、もう水もしまひだい。池の底で鯉がうねうねしてゐたよ。稲は赤ばむそれに不漁は續くこのまゝじやどうにもならねえよ。」

おそで「ほんになあ。早魃の後は二十十日の大荒れと来るんか。おゝ、もう思つてもこわくなるわい。」

(皆無言になつてしまふ。茂吉急に口を切る。)

茂吉「おとつあん。おらあ改めてお願いしたい事があるんだが……。」

茂作「なんだい。また元吉の様な帽子を買つてくれか？」

茂吉「いやいや。おとつさん、おらあ昨夜一晩かゝつて考へたんだが、聞いてもらへるかしらん。」

茂作「何だい？帽子じやねえと、じや一体何の事だい？」

茂吉「おとつさん、おらあ都へ行きてえだが。」

茂作「えッ。都へだと！まあ何の夢を見たんか知らねえが

茂吉そんな事はあきらめるじや。若けえ時分はな、熱に浮かされ易いものじや。そんな都へなんざあ行くものじやねえよ。」

茂吉「おとつさん。お願いなんだい。おらあもう水飲み百姓がつく／＼嫌になつてしもたで、一つ都へ出て働いて見ようと思ふんだい。のう。おとつさん許してくんな。いんま先の話の通り稲は枯れるわ、不漁は續くわ、おらあとてもこんな所じや見込がねえと思ふんだい。都へ出りや村の清さんの様に大きな家も持てるんだし、おとつさん。俺あ一生懸命働くだ。やつておくれよ。」

茂作「お前もまだ若いのにこんな田舎でグラ／＼してゐるのは情なからうがな。都へ出たと言つたつて思ふ様に働く口もなし、それと言つて頼つて行く處もねえだから、やつぱりこゝで働くだ。こゝで働いてゐりや食ふだけは何とか出来るから。まああきらめておくれななあ。」

茂吉「おとつさん。一生の頼みだえ。許しておくれえな。お

らあ見込が有る様な氣がしてならねえだ。のう。おとつさん。二三年でえゝだ。許してくんな。」

茂作「まあ、我慢してあきらめてくれ。わし等も次第に年を取つて行くし、一人のお前を手放すのが苦しいからなあ。」

おそで「茂吉。まあそんな都なんざへ行かんといっておくれようちは淋しうなるし、あの市松さんの様に片腕を恐ろしい機械に取られても仕方がねえしのう。まあそんなところへ行くのは止してくれやい。」

(茂吉シクシク泣き出す。茂作はしきりに煙管につめては吹かしてゐる。沈黙……)

遠くより快活な數名の歌聲聞ゆ。次第に近づいて来て三人の學生現る。一列に並んで軽く足踏みをしてくる茂作の家の前に来てA號令をかける)

A「分隊……止れ。左へ並び……進め。」

B「誠に申し兼ねますが、茄子か胡瓜か南瓜かとうがらしか。」

C「まくわかトマトがありましたら少しく。」

一同「お分けを願ひます。」(一同低頭)

おそで「まあなんちう變な人等やろ。もし？ 一体何をあげる
とえゝのやいな。」

茂作「あゝ。何處の學生さんや知らんが。これこの通りの早
魃で野菜と言ふ野菜は皆枯れてしもたが、昨日引きしな
に取つた茄子が少々あるがこんななんでもえゝかつたら持
つて行きなはれ。」

A「それはどうも。」

一同「有難うございます。」(一同低頭)

茂作「茂吉。小屋の中の籠にあるが持つて来てあげてくれ。」

(茂吉立上つて裏に行く。やがて茄子をかゝへて出て来て
彼等に渡す。彼等は兩手に一つづゝ受取る。)

A「これはどうも。」

一同「相すみません。」(一同低頭)

(A 拾錢玉を一つ置いて號令をかける。)

A「右向ケ……右！ 前へ……進メ！」

(足取り軽く退場)

おそで「まあなんちうのん氣な人ばかりやろ。」

(茂吉羨ましさに彼等の後をいつまでも見送る。)

幕

第二場……風之夜。

舞臺一面眞暗。第一場と同じ場所、雨戸閉め切つて
ある。雨風の音はげしく。時折電光。電鳴物凄く。
幕開く。暫く間。やがて表戸靜かに開いて、中より
茂吉浴衣がけに風呂敷包をかゝへて出る。靜かに戸
を閉める。其時雷鳴凄く鳴り轟く。茂吉急に耳を覆
つて戸口に小さくなる。少しく思案顔なるも急に雨
の中を走り去る。……幕。

第三幕 第一場……夜の都會

舞臺一面黒幕。電氣照明により幕上に自動車電車の
ヘッドライトをうつし自動車電車の往來ぶ様を見せ
る。警笛等よろしく。ジャズバンドの賑やかな中に
〇〇行進曲等の合唱で都會氣分濃厚にする。約數分
續いて次第に騒々しさ去る頃幕開く。

第二場……公園の夜

夜の公園の一段。乳白色の電燈の光二つ。左手の木
陰にベンチあり奥に公園續く心持。遙か向ふに豆電
燈二三。幕開く。暫く物靜か。やゝあつて二人の土
工風の醉漢登場。千鳥足つきよろしく。

A「あゝ酔うた。酔うた。」
B「酒は飲め飲め日本の酒を……カ」
A「飲んで酔うたぞ……酔うのに飲んだ。」
B「酔うた——。兄貴酔うた——。」
A「酔うた酒なら、コラコラ……。」

(フラフラと二人退場)

暫く間。やゝして第二幕二場の服裝で茂吉現る。
革製のトランクを持つてゐる。フラフラとベンチ
の前に行つて急に腰を下す。グンナリと打しおれ
て考へ込む。突然立上つてわめき出す。

茂吉「おとつさん。おかあさん。惡かつた。惡かつた。こん
なつもりじやなかつたに……許しておくれ。おとつさん
許しておくれ。ア……俺あ惡かつた。ア……都へ出り
や何とかなるだらうと思つたのにア……。俺あ間違つて
た。都はこんななけがれた世界だとは夢にも思つてゐな
かつた。誤つた。俺あ誤つた。おとつさん。おかあさん
許してくんな。許して……くん。無斷で持ち出した金
を、虎の子の様に大切にしておたあの金をア……俺あう
まくからめ取られてしまつた。誰に……誰に俺はあやま

るんだい。惡かつた。あ……くやしい。食ふものも食は
ずに俺は我慢して來たがこの空腹があ……恐ろしい。
俺は人の物に手をかけてしまつた。あゝくやしい。おと
つさん、おつかさん許してくんねえ。許しておくれ。す
まない。本當にすまない事をしてしまつた。俺はこんな
罪人になるなら死んだ方がよかつたに……あ……
一体俺あどうすりやいいのだい。恐ろしい、あゝ恐ろ
しい事をしてしまつた。おとつさん、おつかさん、俺あ
會はす顔がねえ。すまない。惡かつた。ア……」
(悶え苦しんだ果頭をかゝへてそこへ打倒れる。す
ゝり泣きの聲。暫く間。二人の美裝をこらした女二
人樂しげに語らひつゝ登場。)

A「ねえあなた。今夜のさ子さんの服裝つたらとつてもす
ばらしかつたわね。」
B「さうね、あなたも見てゐたの。」
A「見てゐたのつて、見ないで置かうと思つたつてあんな
んだつたらすぐ眼につくわよ。」
B「ほんとにね。全くモダンね。私なんざあお側へだつて
寄りつけなかつたわ。」

A 「全くあの會の女王様ね。すばらしいわ。」

B 「御自分でも女王然と構へてらつしやるんだもの、少々にくらしくなつたわ。」

A 「ホ……。」

B 「オヤツ」(二人は打倒れてゐる茂吉に目を落して驚いて立止る。)

A 「まあまたこゝにもゐるのね、いやよ、ほんとに。だからこんな遅くにこんな所を通るもんじやないんだわ。」

B 「まあ御免よ。じや急がうよ、私何だか氣味が悪くなつて來たわ。」(二人退場)

(木陰の間よりしのび寄つた男茂吉の持つて來たトランクをそつと取つて又闇の中に姿を消す。暫くして茂吉は再び立上つてわめき出す。)

茂吉 「俺は罪をおかしたんか？俺は罪人になつたんか。……こんなつもりじやなかつた。恐ろしい事をしてしまつた。おとつさん、おつかさん、許してくんな。許してくんな。ア……。」「(又打倒れてしまふ。そこへ白服を着た警官が来る。茂吉の打倒れてゐるのを見付けてするどく怒鳴る。)

蛇 こ 蛙

算 登

登場人物

蛇、蛙、其他大勢の蛇蛙等

背景 晩秋

水のかれた溝を蛙が一匹ふるへながら跳ねて來る。ふと立止つて

蛙獨唱 おゝ寒。小寒、雪が降る。家もないのに雪が降る。食べ物ないのに雪が降る。俺は凍えて死ぬだらう

獨唱やめて

蛙 「あゝ全く寒くなつて來た。隣りの鳴三君も死んだ。僕もやがてあの通りになるのではないかしら……。此の儘ではとても生きてゐられない。噫呼……」思ひに沈む。

此の時向ふの畔道から、弱り切つた蛇が、そろそろと這つて來る。蛙は逃げようとあせる。けれども駄目である。あきらめて止り。

蛙 「やあ蛇君か、此の頃はどうかね。僕はもう君に食はれたつていゝよ」(全く悲觀した態度で話しかける)

蛇 「御同様。君、僕は寒さとひもじさで、ひしひしと骨が痛むやうだ。春夏と随分君達を追廻して苦しめたものだが……。もうそんな事はしようにも出來ないよ」……害心のない言葉。蛙安心して、然し力無く、

蛙 「全くだよ。君廣い田の中を今こそ弱つてゐるが(足を指して)此の足で命懸けに逃げ廻つたが随分恐かつたよ。

警官 「おい！おい！何をしてゐるんだ。起きろ！」

茂吉 「エーッ！」

(茂吉は頭を上げて驚く。急に立上つて、ベンチの上に置いたトランクをかくさうと手を出す。)

茂吉 「アッ！……。やつぱし都會は罪惡の穢土かつ……。」「

警官 「オイ！一寸本署まで來い！」

(茂吉は打しおれて動かうとしない。)

警官 「コラッ！用があるから本署まで來いと言ふに文句があるか。歩けッ！」

(茂吉引づられてシオシオとついて行く……。)

幕 (おはり)

然しね君、今になつて見ればかへつてあの時分の方が、

僕には幸福だつたよ。食べ物はたくさんあつたし、毎日自由に歩き廻つて、一日一日を無事に暮した。けれども此の様な苦しい目に會ふ事だけは知らなかつたよ」

蛇 「僕もその通り。石垣の上での暖い日向ぼつこ。然し今では其の樂しかつた事を憶ひ出す事の出來ない程辛い目を見てゐるんだよ。もうすぐに雪が降るが、さうなつたら君全く凍え死をしなければならぬよ。」

蛙 「噫！食べるものはなし寒さは増すし……。(ふと語調をあらためて)然しなんだね……。もうかうなれば蛇君のやうな強い者も僕等のやうに弱い者も皆同じだね」

蛇 「さうだとも。全く同じさ。だからこれから仲良くしようぢやないか。お互に」。

蛙 「あそれがよい。二人が共に助け合つてね。(ふと思ひ出して元氣に)では二人で歌を歌つて仲間を呼び集め、勢をつけようぢやないか」。

蛇 「よし。じやあ。」

蛇蛙合唱

「おゝ寒、小寒、雪が降る。野にも山にも雪が降る。

白い冷い雪が降る。食べ物お宿見つからず
食はず飲まずでをつたなら、強い者でも弱くとも
飢ゑて凍えて死ぬ許り」
「さあさ、探したよいお宿、力合はせて働いて
飢ゑず凍えず死ぬまいぞ、一人縮んで泣いてゐず
出て来い出てこいよしいと来い」
——幕——

詩 藻

大和田 清朗

初夏自適

樹爲天蓋齋新涼 石帶青苔雨後香
祿薄荆扉少塵客 先生自適午眠長
庭栽碧竹起青嵐 室著芳尊獨酌堪
未買美田兒不悞 先生自適意無慙

誰言督吏徵租急 良宰如今憫庶氓

夏日偶我

翠竹隣槐綠不孤 微涼徐動暑氣無
吾家幸有此餘德 休笑主人名利迂

偶成

人世安分少嘆嗟 不迷野老路三叉
春花秋葉節無極 萬象森羅天有涯

初秋田園

小雨過山洗暑蒸 秋空一點舞蒼鷹
江州請見齋田域 粒々作珠新穀登

秋思

秋庭小雨梧桐寒 承露胡枝花一團
世上風雲非我事 悠々擁膝對青巒
竹馬回頭半作灰 逢秋幾度撫霜顚
人間識足長生訣 淺酌貪看籬菊開

詠史

大事焦眉誰決期 艤艫壓海八洲危
五山一喝膽如嶽 有此鎌倉豪快兒

山遙夢裡聽輕雷 水近書窓暑氣摧
午睡漸醒新浴去 先生自適喚鮑來
園庭晝靜稚鷄馴 睡足孩孫笑語頻
借問人間真意義 先生自適樂清貧
雨餘新竹欲凌親 未歲兒孫一倍伸
有此天工自然美 先生貪看德求隣
細雨新晴綠壓軒 泰山花發大如盆
清香暗動多涼味 吟榻枕肱催醉魂
小庭有大樹稱秦山木夏時花開
大尺計清香可掬

寄清堂先生

參商相距匪飛翔 老大春秋徒累霜
有信天寧杜鵑發 寺僧先問奈清堂
天寧寺在彥根城外山麓曾與
先生行樂所

登彥根新築町舍

廳閣新成雄彥城 湖山十里悉分明
琵琶霧散船來去 佐和雨晴雲送迎
蟠蜿臨流魚鼈躍 高層遮日鷺鴒驚

佐和山城趾

佐和山城爲石田三成舊
址蓋天與要寨也當時人
云三成有過曰曰佐和山
城曰百間橋曰嶋左近而
如今佐和山城獨巍然摩
天空令後世想當年壯舉

吁

二者空消一者存 一存長使泣公孫
風濤萬馬關城塞 松籟千軍逼藩垣
豎子金吾差決斷 寵兒治部仆煩冤
衰盛三百有年跡 梟叫猿啼月半痕

詩



詩

時の流れ

種村儀平

(春)

春草枯れて
寂然たりし
廣き野邊
風和やかに
空晴れて
春の女神の
訪は
死せるが如く
眠りし草木
瀾れにし泉

瘦せにし野山
默せし小鳥
皆一時に
光を受けて
歡びの色
あたりに満ちぬ
萌ゆるや若草
咲く梅櫻
囀る小鳥
照るや春の陽
いと長閑にて
霞棚引く
花曇り哉
永き春の日

六〇

何時しか暮れて

臘月夜に

春深みたり。

(夏)

川邊なる
蘆の繁りて
宵毎に
螢の數多
光るめり
夕べ涼しも
我立ちて
星を仰げば
遙かなる空
ホノボノ明けて
樹々の緑
色増せば
絲遊野山に
もえ出で初めつ
新羅萬象

詩

これ悉く

夏の御神に

踏みにしられて

熱き光に

苛まれつゝ

喘ぎ喘きて

夏また過ぎぬ。

(秋)

吹く風の

音にしも知れ

秋立ちて

靡く尾花の

葉末より

鳴く蟲の音の

聞ゆれば

山の彼處に

秋月出でぬ

夜もすがら啼く

蟲休らへば

六一

詩

秋の夜長の
忽ち明けて
天高く晴れ
氣彌澄みて
小春日和の
暖き哉
時雨しぐれて
秋の織室――
小鳥の高音
梭音に似て
織りなす
錦に
秋の装ひ
全くなりぬ。
(冬)
野分して
又野分して
冬の日の
あはれはいとど

六二

まさりける
霜の使の
現はれ出でて
怪しきいぶきの
かゝると見れば
野山を飾りし
紅葉の落ちて
散り敷く
木の葉の
堆高き哉

夢の精

大森久壽

ぼんやりと
夢の御國の入口で
夢のごとさまよひて
夢の玉手箱を拾つて
夢の御國へ行けり。

ゆら／＼と

夢のごとしやぼん玉
靜かなる夢をのせて
數多の夢を追ひ夢に追はれて
夢の御國に消失せり。

うつ／＼と

面白い夢に會ひて
夢のごとしたいて
有りし夢の活劇に
夢の御國に逢へり。

雀

久米孝男

騒がしい雀よ！
灰色の雀よ！！
無邪氣な、貧乏神の息子の雀よ
お前はこれ味氣ない片田舎の朝明けに
詩

お前は持前の歌を歌ふ。

騒がしい雀よ！！

黒色の雀よ！

お前のすみかは煤けた屋根裏だ。
物干竿だ。電線だ。

悠紀の米

曾我繁三

- 一、瑞穂の國は滋賀の里
三上の村に降されし
悠紀の齋田尊ふとしや
壽ほぎまつれ 諸共に
- 二、幸あれかしと祈る
至誠と神の加護により
穂に穂みのりて 萬々歳
よろづの御儀も濟みにけり
- 三、彌榮え行く日の本の
天津日嗣を傳へらる

六三

今霜月の大典に

供へさせらるゝ悠紀の玉

四、舉縣一致の赤心は

寶となりて表はれぬ

今日の譽を縣民は

壽ぎまつれ 永久に

試験前夜

川 澄 健 一

自然は眠つてゐる。

静寂の車は回轉し續けてゐる。

天人の足音も聞えさうな

憧れの静夜!!

涼しい秋風に

湯上りのまだほてゝした頬つべたを

撫でられながら たゞ一人

駒下駄をはいて

庭園を歩いてみた。

秋の静夜!!

それは偉大な力の持主だ。

一點曇りなき碧空に

金剛石を撒き散したやうに

燦然と光る星!!

今まさに何かをつけようとして

淡い光を投げる

そのまたまきは……

あたりはあのいちらしい

こほろぎでうづめつくされてゐる。

さうして彼女は秋の悲哀を

一層増してゐる。

明日の試験は……

不安は刻一刻と迫つて来る。

崇高な神秘的な星を見れば見る程

不安は増して来る。

けどこほろぎは

悲しさうに泣いてゐる。

我に同情してくれる様に……

その同情を胸深く抱き込んで

又むつとする

書齋にかへつて來た。

春の印象

吉 原 定 藏

枯れた芝草の上の

眞赤な櫻の葉が散らばつて居る上に

足を投げ出して

そしてあの歌を思ひ出す時

春の頃の記憶が

ひし／＼と心にせまる

あの頃、あの頃は春だつた

眞暗な夜、白い満開の櫻の花も見た

野も山も、若い緑につゝまれて居た

そしてタンポポも咲いて居た

蝶々も飛んで居た

忘れられない旅の

詩

三つの時

組 田 重 嘉

暖き搖籃に育くまれ

小川に魚を捕へ、山に登りて鬼ごっこ

野邊に蝶を追ひ歩き、樹間に蟬をあさり

眞直に新芽の様に上へ上へと伸びし少年時代よ

無邪氣な樂しき過去の追憶よ。

幾度となく心の計畫を裏切り

冷靜なる悔も時の煙で薄らぎ

誘惑の手に支配され

惜しき時代を無爲に過し行く

心も傷つき身もけがれに染みし我が現實よ。

理想郷の鐘の響、泉の清水
 おゝ、永遠なる我が前途よ
 明るき輝やかき夢の樂園よ
 我が生命は未來なり
 大洋の彼方、雲の上、我が未來よ。

罪の人行く

夕靄ほの淡き土手の小徑
 彼方に牽かれ行く罪の人
 冷き鐵の手枷
 深き編笠
 四邊聲なくサーベルのみ響く
 青白く垂れし後項
 裳にあらはな細脛
 ひきづり行く尻切れ草履
 冷き沈黙、悔恨か
 罪の恐怖か、妻子等か。

つと——編笠越しに夕暮の空を仰ぎぬ
 澄める空、無垢の空、清浄な空
 彼果して何の感慨ぞ
 犯せし罪と秋の空
 霄壤營なき相違よ。

敗將北へ歸る

岡庭博

夏は來ぬ直隸の野に
 欽聲聞ゆ直隸の野に
 滄州城外に敵は滿つ
 北へ——攻め來る
 敵軍近し保定城
 戦利なし如何にせん
 滿城の守り遂に落つ
 恨は長し保定城

「赤賊其何する者ぞ」

胸は躍る老將軍
 綠林の野をはせし時
 長白山頭朝風涼し
 あゝ若き日は又と來ず」

思ひは歸る今日の身上
 敗軍の將兵を語らず
 十八省には敵滿ちて
 僅に餘す東三省」

あゝ懷しの故郷よ
 あゝ歸り來ぬ滿洲へ
 あゝ歸り來ぬ故郷へ」

かくして雨亭張作霖は滿洲の野に黒煙をあげて倒れた。
 亂世の英雄の最後に最も適しく
 又敗軍の將の最後に最もふさはしく——

我あくまでも戦はん」
 叫びし人も今は早や
 傷つく鳥よ落ち行かん
 一時の恥はしのぶとも
 再舉を期せん奉天省」
 我故郷へ歸るとも
 中原の鹿逢に得ん」

滿月淋し北京城
 一年有餘住みなれし懷仁堂よ
 いざさらば——

見送る眼には涙あり
 思は淋し北京驛
 今や破れぬ支那平定の夢！
 はた何時か見ん此の首都を！

肅々として汽車は走る
 思は上る二十有餘年
 あゝ若き日の思ひ出に

太陽

松宮 實

太陽よ！偉大なるお前の姿が
東の空に現はれる時
今までの闇黒が追はれて
明るい天國の様な世界が生れる
小鳥等は喜び歌ひ
人々は威勢よく仕事に取掛る
悪者は姿をかくし
正しい者のみが喜びに輝く
此の世の生物の凡ては
お前の尊い恵みによつて生きるのだ
あゝ！貴いそして偉大なる太陽よ。

小さきもの

夜の原に啼く小さい蟲よ
嗚呼、お前の聲は何といふ

帽子よとまれ

ころ／＼／＼ころ

帽子がこける

溝へおちなよ

田んぼへはまんな

ころ／＼／＼ころ

帽子がこける

何所まで行くんじや

一人じやあぶない

汽車ごっこ

ポツボン／＼

早いぞ／＼

急行列車だ

小供の汽車だ

それ行け

行け／＼

詩

美しいものであらう。

神の與へ給ひしもの故に

しみ／＼と私の心にしみ渡り

何がなし天地の靈氣に

あゝ、さうだ神の、あゝ、神の、

偉大なる神の抱愛に

私を涙ぐませる。幸福な自然よ！

小さき蟲よ！あゝ、小さき物よ！

あゝ、私とお前は平等に

温かき神の愛に生きてゐるのだ！

闇夜私は深閑として閑境で

しみ／＼と神の抱愛を感じた。

飛んだ帽子

清水 正義

ころ／＼／＼ころ

帽子がこける

吹くなよ風よ

あつちの岡まで

ポツボン／＼

走るぞ／＼

なわでつないだ

小供の汽車だ

みんな

のけ／＼

あぶない／＼

夕 暮

竹 内

秋の夕暮夕日が赤い

赤い夕日がお寺を照す

お寺の鐘がゴンゴンと

赤い夕日に照されて

つかれつかれて鳴つてゐた

赤い夕日は鐘の音を

じつとだまつて聞いてゐた